

W. モリスの社会主義をめぐって

— 『ユートピアだより』とその周辺 —

田中 史郎

はじめに

1. モリスの社会主義運動の足跡
2. 『ユートピアだより』をめぐる余録
3. モリスの社会主義像
4. モリスの革命観
5. 結びにかえて

はじめに

本稿では、W. モリスの社会主義を紹介することに主眼がある。モリスといえば、「アーツ・アンド・クラフツ運動」と共に紹介されることが多い。そしてやや立ち入って彼を説明する際には、しばしば、彼は詩人であり工芸家であり社会改革家であるとか、あるいは、彼は芸術家であり作家であり革命家であるというように、三つの性格を合わせもつ人物として語られる。確かに、モリスは、どれが「主」で、どれが「従」とはいえないほどの多彩な活動を精力的に行っている。しかし、その経歴をたどれば明らかなように、晩年の成熟期をむかえるにつれて、それまでの多彩な活動は、社会主義運動に裏打ちされ、またそれを豊富化するように展開されていったと思われる。

そのように考えると、モリスの著作においては、『社会主義』（E. B. バックスとの共著）¹⁾、『ジョン・ポールの夢』、『ユートピアだより』が重要なテキストとなろう。とりわけ『ユートピアだより』は、その中心をなす。というのも、それは、最も晩年に書かれた長編の作品であり、また物語の形式で展開されているが故に鮮明なイメージが描写されているからに他ならない。

そこで、モリスの社会主義運動の足跡をたどりつつ、『ユートピアだより』を中心にモリス社会主義について考察したい。

1. モリスの社会主義運動の足跡

すでに述べたように、モリスは早くから「詩人」、「工芸家」として名を馳せたが、政

治活動家や社会主義者としてのモリスの活躍はむしろ晩年にある。

モリスが政治的発言をするのは40歳代になってからである。それが鮮明になったのは、H. M. ハインドマンの創設した「民主連盟」(Democratic Federation)に1883年に加盟し、オックスフォード大学での講演会(同年)で社会主義者であることを自ら宣言したことによる。モリス、49歳の時である。この「民主連盟」は翌年に「社会民主連盟」(Social Democratic Federation)に改称された。モリスは執行部に入り、機関誌『ジャスティス(Justice)』にも執筆をした。そこで、ハインドマン、バックス、エリノア・マルクス²⁾、E. エイヴリング³⁾などと共に活動をしたが、それはイギリスにおける最初のマルクス主義者としての活動であったと評価されている。

だが、ハインドマンとの対立が生じた。その対立とは、ハインドマンの権威主義的性格から生じた独裁的・恣意的な支配にたいする反発であったようだ。ともあれ、モリスは「社会民主連盟」を脱退し、「社会主義同盟」(Socialist League)を結成した。このとき共同行動をとったのが、先のエイヴリング、エリノア・マルクス、バックスなどのほか「社会民主連盟」執行部の多数であったという。そして、モリスが編集長となり機関紙『コモンウィール(Commonweal)』を創刊している。これは、後に週刊になり、売れ行きも平均して2千から3千部に達したという。先にあげた、「社会主義」、「ジョン・ポールの夢」、「ユートピアだより」など主要な著作の殆どは『コモンウィール』に連載されたものである。

しかし、ここでも対立が生じた。一方では議会政党を目指す「議会派」が生まれ、他方では爆弾テロをも促す「アナキスト」が台頭した。モリスは、前者に対しては悪しき政治的妥協以上のものを見出すことが出来ず、また後者にたいしては建設のため社会主義からはほど遠いものを察知したといえよう。こうした中でモリスは、1890年に「社会主義同盟」を脱退して、「ハマスミス社会主義協会(Hammersmith Socialist Society)」を結成するに至る。モリス、56歳の時である。

その後は、体力的な問題もあり、政治活動は控えるようになった。活動の中心は、その年に設立した印刷工房「ケルムスコット・プレス」に移行していったという。

ところで、当時のイギリスの政治や社会をめぐる状況は以下のものであった。すなわち、1880年代初頭においては、イギリスの経済力には産業革命の全盛期ほどの活況はなく、不況や失業などの社会問題が顕わになってきた。そうした状況にあって、労働者は、一部は急進化していったものの、政治的には自由党へ期待を抱くしかなく、自ら社会主義の構想を持つことはなかった。また、知識人は、様々な社会主義的クラブを作ってはいたが、それ以上ではなかった。

しかし、こうした状況は80年代後半には大きく変化したという。たとえば社会主義たちの街頭活動は盛んになった。むしろ、弾圧も厳しさを増し、モリスにも逮捕歴がある。だが、それを上回る運動は、炭坑、繊維、運輸などの労働者にひろまり、ストライキも頻発し、社会主義者の間では「革命間近」の予感さえ生まれていった。1887年の「トラファルガー事件」は、そうした運動の一つの頂点でもあった。

モリスは、このような時代を生き、自らの多彩な経験をもとに社会主義を構想していっ

たといえる。『ユートピアだより』はその集大成とも言うべき作品である。以下に、晩年を中心としたモリスの年譜を掲げておく。

- | | |
|-------------------|---|
| 1834(天保 5)年 | ロンドン郊外のウォルサムストウで誕生。父は、証券仲買人。 |
| 1859(安政 6)年、25 歳 | ジェインと結婚。 |
| 1883(明治 16)年、49 歳 | 「民主連盟」(翌年、「社会民主連盟」に改称)に加盟。 |
| 1885(明治 18)年、51 歳 | 前年に「社会民主同盟」を脱退し、エイヴリング、エリノア・マルク
ボックスらと共に「社会主義同盟」を結成。機関紙『コモンウィール』を創刊。
ボックスとの共著「社会主義」を『コモンウィール』に連載(88年まで)。 |
| 1886(明治 19)年、52 歳 | 「ジョン・ポールの夢」を『コモンウィール』に連載(87年まで)。 |
| 1887(明治 20)年、53 歳 | 「トラファルガー事件(血の日曜日)」の勃発。 |
| 1888(明治 21)年、54 歳 | 『ジョン・ポールの夢』単行本、刊行。 |
| 1890(明治 23)年、56 歳 | 「ユートピアだより」を『コモンウィール』に連載(同年 10 月まで)。
ただちに、アメリカで「海賊版」が発行。
「社会主義同盟」を脱退して「ハマスミス社会主義協会」を結成。
印刷工房「ケルムスコット・プレス」を設立。 |
| 1891(明治 24)年、57 歳 | 『ユートピアだより』単行本、刊行。なお、92 年には、「ケルムスコ
ット版」刊行。 |
| 1893(明治 26)年、59 歳 | 『社会主義』(ボックスとの共著)、刊行。 |
| 1896(明治 29)年、62 歳 | ハマスミスの自宅で死去。 |

2. 『ユートピアだより』をめぐる余録

日本では、『ユートピアだより』という書名が定着しているが、原著のタイトルは必ずしもそうではない。原著タイトルは、*News from Nowhere : or, an Epoch of Rest, Being Some Chapters from a Utopian Romance* である。これをあえて直訳すれば、「どこにもない場所からのお知らせ——または、安心の一時代、ユートピアン・ロマンスからの諸章」となる。では、これがどうして『ユートピアだより』として定着したのだろうか。日本での翻訳の歴史を辿ってみよう。

最も古い邦訳は、1904(明治 37)年に堺利彦(枯川)訳による『理想郷』である。単行本の *News from Nowhere* が上梓されてから僅か 14 年後の翻訳の出版である。そして、1925(大正 14)年に布施延雄訳『無何有郷(むかうのさと、むかゆうきょう)だより』が、さらに、1929(昭和 4)年には村山勇三訳『無何有郷通信記』が出された。これまでが戦前の出版である。「理想郷」や「無何有郷」という表現が、戦後にいたって「ユートピア」と訳出される起源になったといえよう。

戦後に入ると、1968(昭和 43)年に松村達雄訳『ユートピアだより』(岩波文庫)、および 1971(昭和 46)年に五島茂・飯塚一郎訳『ユートピアだより』(『世界の名著、ラスキン・モリス』中央公論)が相次いで出版される。「ユートピアだより」という表現が定着したといえる。そして最も最近の邦訳は、2003(平成 15)年に出された川端康雄訳『ユートピアだより』(晶文社、ウィリアム・モリス・コレクション)である。また、2004(平成 16)年には五島・飯塚訳『世界の名著』の一部が『ユートピアだより』(中公クラシックス新書)として公刊された。

戦前戦後を通じて旺盛な翻訳状況であり、要望の強さがうかがわれるが、こうして、「ユートピアだより」というタイトルは不動のものとなり現在に至っている。「名訳」といえる。

ところで、モリスが『ユートピアだより』を執筆する契機になったのは、アメリカの社会主義者 E.ベラミー『顧みれば—2000 年より 1887 年をかえりみる—』(E.Bellamy[1888], *Looking Backward 2000-1887*, 山本政喜訳(岩波文庫)1953 年)にあるということ知られている。本書は、わずか 2 年で、アメリカで 14 万部、イギリスで 4 万部が発行されたという⁴⁾。かなりの影響力を持った書物といえる。

そのような本書に対してモリスは全く否定的だった。モリスは、社会主義とはいえベラミーの「国家」と「労働」に対する思想に共感するところを見いだせなかったのである。すなわち、ベラミーの社会主義は「国家社会主義」であり、これに対してモリスは「共同体社会主義」を提起し、また、ベラミーが労働を「煩勞(toil & trouble)」と見るのに対して、モリスは労働の「喜び(joy in labour)」を顕揚した。その意味で、対照的な社会主義像といえる。モリス自身のほぼ最後の作品でもある『ユートピアだより』には、そうした想いが込められていると考えられるのである。

続いて、『ユートピアだより』を俎上にのせ、その社会主義像と革命観について素描してみよう。

3. モリスの社会主義像

『ユートピアだより』は、主人公である「わたし」が未来の世界に迷い込む、ある種のファンタジー小説である。5 日間の夢の物語だが、そこには革命が成就し、社会主義が現実のものとなった未来世界とはどのようなものかが見事に描かれている。そして、それとともに、それにいたる革命の進行に関しても興味深い叙述がある。この物語は、モリスのそれまでの社会主義の運動と理論の集大成ともいえる内容を持っている。幾つかのエピソードを紹介しながら見てみよう。

(1) 商品と貨幣の廃絶

主人公の「わたし」が市場でパイプを買おうとしたときの場面が描かれている。「こんな立派な品ですから、高いのでしょうか？」と、女性の店員に「わたし」はいう。それに対して、一緒にテムズ川を旅をする船頭のディックは、「わたしの肩に手をかけた。ふり向

くと、かれは奇妙な目配せをしている。もう死に絶えた商業主義を持ち出さないようにと、戒めているのだ」、「それでわたしは顔を赤らめて黙った。...わたしの言うことがこの子にはかきもく見当がつかないらしい。」(第6章)。

見られるように、商品と貨幣の廃絶した社会主義社会では、当然ながら「代金」を払うというようなことはなくなる。そのような商業主義はすでに死に絶えてしまっているのである。これがモリスの社会主義像の端緒である。マルクスは『資本論』において資本主義分析のとば口を商品と貨幣に求めたように、モリスは社会主義像を示す端緒を商品と貨幣の廃絶に求めたといえよう。

(2)法の廃止

「あなた方は民法を廃止してしまわれたようですね。」と、「わたし」は質問する。この質問に、革命の過程を知り尽くしているハモンド老人は⁵⁾、「勝手になくなったのですよ」、「民事裁判所というものは私有財産防衛のために設けられていました。」(第12章)と答えている。つまり、財産の私有制が止揚されたので、民法や民事裁判も消滅したというわけである。また、同様に「刑法」も廃止されたという。「私有財産がもたらした法律や法的『犯罪』やらも一切なくなったのです」、「われわれには刑法もありません。」(第12章)。

それでも「わたし」はくいさがる。「それじゃ、あなた方には民法もなく、刑法もない。しかし、いわば市場の法律はなのですか、物品の交換のための規則もないですか。というのは、... (私有) 財産はというものはないにしても、物品の交換はしなくてはならないでしょうから」。これに対してハモンドは、「もちろん、市場の規則類はあり、それは状況によっていろいろ違うし、一般の習慣によって導かれるものです。...これらを法律とは呼びません。」と明確に答える。

ここでは二つのことが述べられている。その一つは、商品と貨幣、つまりは私有財産が消滅すれば、そこから生じる民事事件や刑事事件なども消滅しているので、それらを対象としている民事法や刑事法も存在しなくなるということである。商品経済から発生する法規範そのものが消滅しているといえよう。

しかし、もう一つは、市場(商品と貨幣の廃絶された後での物品の交換所)の規則類は残るということである。たとえば度量衡や時間の単位などを想定すればよいだろう。これらは商品経済とは無関係に成立するといつてよい。その意味で「習慣」によってもたらされるともいえるし、便宜のために規定されたものともいえよう。単なる「規則」としての法と、「規範」としての法との区別がなされており、注目に値する⁶⁾。そうした「規則」は存在するが、それは先のような「法」ではないというわけである。

(3)政治、議会と国家の死滅

ウェストミンスター寺院の横を通ったときの出来事が記されている場面がある。「ウェストミンスター——その残骸ですよ」、「あれは現に一種の補助的な市場や肥料貯蔵所に使われています。」(第5章)と、ディックは説明している。

また、「政治はどういうふうになっておられますか。」という「わたし」質問に、ハモ

ンドは答える。「政治にかんしては実に上手くいっている、...というのは、われわれには政治なんか何にもないからです。」(第13章)と。

国会や議会はすでに無くなっているのに、かつての議事堂も肥料貯蔵所になった。そもそも、政治そのものが存在しないということである⁷⁾。

「社会民主連盟」や「社会主義同盟」において、モリスは議会主義にたいして反対の立場であったことを述べた。そうした立場を、かつての議事堂を肥料貯蔵所にするという筋書きによって暗示しているともいえよう。代議制政治や中央集権政治に対する徹底した批判が見て取れるのである。

(4) 義務教育の廃止

たま、ハモンドは教育についても述べている。「あの時代には、当時の人々のよく使った表現の『生存競争』は、大多数の人々の『教育』を痛めつけて、それをあまり精確ではない知識のケチな施しと化してしまいました」、「知識というものは、かれ自身が自発的にそれを求めずにいられぬ気になるとき、だれでもいつでもすぐに手に入れられるものなのです。」(第10章)。

ここでも「わたし」は、子どもには強いてでも数学などの教育を施すべきだと反論する。これに対してハモンドは「わたし」に「それでいま算術や数学をどのくらい知っていますか」とあざけるよう笑った。

見られるように、モリスの教育に対する立場は明確である。押しつけ教育や詰め込み教育などを全く無意味と考えている。また、学問に対しても「商業主義」を批判している。教育とはどうあるべきか、その本質に迫る問いかけであるといえよう。

(5) 喜びとしての労働

そして、もっとも重要な労働の問題に話がおよぶことになる。「労働の報酬が現実にならない場合に、...どうしてその人々を勤勉に働かせられるのか」と、「わたし」は問う。それに対して、ハモンドは「報酬はたっぷりありますよ」と答える。「つまり、創造という報酬がです...創造の喜び——それはつまり優秀な仕事が出来たという意味なのですが——、その創造の喜びに対して、もしあなたが金を請求しようとなったら、つぎには子どもを生んだことに対して請求書を送る、というような話を聞かされることになるでしょう」(第15章)。

「労働の報酬は生きることそのものです」、「全ての仕事はいま楽しいのです。...つまり、それは芸術家として仕事をしているということですね。」(第15章)。

すでに述べたように、労働に対する認識には二つの見解がある。その一つは、労働を「煩勞」として捉えるものであり、この立場からすれば、労働には労賃などの報酬が不可欠なものとなろう。しかし、もう一つは、労働を「喜び」と把握するものであって、労働そのものが報酬であるという理解にいたる。このような後者の議論には、決まって理想論だの空想的だのといった批難が浴びせられる。そして一顧だにされない。しかし、現実を止揚する社会を構想するというのであれば、こうした問題を熟慮せざるを得ない。モリスの労働に対する思想がここに集約的に示されている。

(6) 夢からビジョンへ

こうして最終章では、華やかな宴と、それからの覚醒で終わる。そして、この物語は次のフレーズで閉じられている。「わたくしが見てきたようなことを、もし他の人々が見ることができたなら、そのときこそ、単なる夢というよりは一つのビジョンと呼ぶことができるであろう。」(第 32 章)。

ここでいわれているビジョンとは、あえていえば、現実的な未来図や青写真ということになる。そしてそれを共有することの意義が示されている。つまり、豊かな想像や構想の共有が我々の全てに問われているように思われるのである。

まだ、他にも、都市と農村、家族、外交など多岐にわたる問題が提起され、議論されている。

みられるように、来るべき世界とは、いかえれば、商品や貨幣が止揚されている世界である。そこでは代金の支払いなどの行為は存在しない。そして、当然のことながら、商品経済から派生する、私有財産をめぐる争いや犯罪も消滅している。民法も刑法も、法律一般が消滅しているのである。したがって、法律を制定する議会や、政府、政治も、そして国家も消滅している。

また、制度としての学校も存在しなくなっている。というのも、「生存競争」などが過去のものとなって、知識や労働の質がまったく変わっており、それが本来の姿に戻っているからである。モリス思想の真骨頂といえよう。

こうした諸問題に関して、われわれは何処まで想像力豊かにそして深く考えたことがあったらだろうか。本書はそれを問うているのである。

4. モリスの革命観

このようなユートピアが描かれている一方、この物語の圧巻は次にある。それは、こうした社会ががどのようにして成立したか、つまり革命がどのように進行したかを述べている第 17 章に他ならない。他の章と比較すると圧倒的に分量の多い本章は、本書を単なる夢物語にしないリアリティを与えているといえる。

(1) 革命の発端

社会主義いたるこの革命は、本書においては、1952 年に始まったとされている。そのモデルになったのは、1887 年 11 月 13 日に実際に起こった「血の日曜日」の事件、すなわち「トラファルガー事件」だといわれている。この日に、トラファルガー広場で労働者の大規模な集会が行われたが、それは大虐殺事件へと変貌したのであった。

すでに述べたように、1880 年代後半のイギリスは、不況や失業などの社会問題を抱えており、労働者の一部は急進化し社会主義たちの街頭活動は盛んになったのである。トラファルガー事件は、そのような状況で起こった大事件であった。

第 17 章から幾つかの文を抜き書きしながら、考察しよう。「わたし」は、「その変化は、

かつて『革命』と呼ばれていたのですが、それは平和裡に訪れたのですか？」と質問する。それに対して、ハモンドはこう答えている。「平和裡に？」、「19世紀の混乱したあわれな連中に平和などありえたでしょうか。初めから終わりまで戦争でしたよ。」と。そして、トラファルガー広場での衝突と惨劇、これが「革命の発端になった」（第17章）というのである。

(2) 革命への発展

では、なぜ、衝突が革命に転化したのか。どのようにして、革命が発展し、それが成就したのか。その前提や背景にはどのようなものがあったのか？

こうした点にかんして、ハモンドは次のようにいう。「もちろん、先ほど述べた、自由を求める本能があったからにはほかなりません。たしかに、奴隷階級には自由なくらしの幸福など考えもつきませんでした。それでも雇い主に抑圧されているということは理解できるようになり、手だては分からぬにせよ、雇い主などいなくてもやっていけると思うようになったのです。」（第17章）。

これが、当時の労働者階級のおかれた状況であり、革命へ出発点だったのである。当時の労働者は、一部は急進化していったが、政治的には自由党へ期待を抱くしかなく、自ら社会主義の構想を持つことはなかった。しかし、見られるように、そうした状況から事態が次第に変化していったといえる。「雇い主などいなくてもやっていける」という認識にいたった変化の意義は実に大きい。

(3) 革命の内実

そして、次のハモンドの言葉はとりわけ興味深い。「<ゼネラルストライキ>がはじまっていることは聞くまでもなかったのです。鉄道は走らず、電信も不通です。市場には入荷した肉類、魚介類、青果物も放置され、腐ってゆきます。次の食事でありつづくのに労働者に頼り切っていた何千もの中産階級の家族は、その日の必需品を調達するために、家族のなかの体力あるものを使って、懸命な努力をしました。そうした連中の中では、...この思いがけないピクニックをどこかおもしろがっていたそうです——それは、全ての労働が楽しみとなる、来るべき時代の前触れだったのですね。」（第17章）。

中産階級にそのようなそのような変化が訪れるとともに、民衆の組織にも変化が生じた。ハモンドはさらに続けていう。「闘争そのものが彼ら（民衆）の間に必要な才能を発達させるからです。...内乱がなければ、正当な行政能力が労働者の間に発達してきたかどうか、わたしはきわめて疑問に思います。いずれにしても、そのような才能が存在し、そして民衆は反動主義者たちの間の最上級の人々に匹敵する以上の指導者をまもなく得たんです。」（第17章）と。

こうした部分を読んで、小生より高齢の誰かは戦後まもなくの生産管理闘争やマッセンストライキを、そして同年代の誰かは60～70年代のあの闘争を思い浮かべられたかも知れない。

ゼネストの渦中の状況はまさにそのようなものであろう。中産階級においては、一部ではあるが、強いられた労働にある種の喜びを感じ、また、労働者階級にあってはゼネスト

の混乱の中から指導者が成長してゆく。そうした混乱と混沌の状況から未来像が誰にでも実感できるようになるのであろう。先の社会主義像はこうした過程を経過しつつ醸成されていったと、モリスは述べているといえる。これがモリスの革命観であろう。

5. 結びにかえて

それはともあれ、モリス思想の中心をなす商品経済の止揚を軸とする労働の復権と国家の死滅を希求する思想が、ここに示されている。とりわけ労働の思想、すなわち「労働の報酬は生きることにそのものです」という思想は、こうした当時の様々な政治運動や労働運動から生まれたものであろう。

ゼネストのさなかでの労働は、それまでの労働とは質を異にしていたのであり、ゼネストへの何らかの参加者はそのことに、すなわち労働の意義の本質的な変化に、気が付きはじめていた。本来、労働は「ピクニック」のように「楽しい」ものなのである。K.マルクスの言葉を借りれば、「労働が単に生きるための手段だけでなく、労働そのものが生活の第一の欲求となる」(『ゴータ綱領批判』)時代ないし社会への移行の過程はこのように進行していったというわけである。

モリスのテキストを吟味すると、モリスの社会主義像と、社会主義に至る革命観が鮮明に浮かび上がってくる。モリスの社会主義を「空想的」だとか「センチメンタル」だといって批難することはたやすい。しかし、我々は本当に来たるべき社会主義社会と、それへの過程を真剣に考えたことがあるだろうか。われわれには、モリスから学ぶべきことが多々あるのではなかろうか。モリスが我々に突きつけている課題は、今なお大きい。

¹⁾ “SOCIALISM – Its Growth and Outcome –” いまだ邦訳はないが、現在、大内秀明・吉村典子・矢元祥子氏とともに翻訳出版の準備を進めている。なお、参考のために、本書の目次を掲載しておきたい。『社会主義—その成長および結果』。第1章 古代社会。第2章 最初の歴史的な古代社会。第3章 古典から中世期への移行。第4章 中世社会—その初期。第5章 中世の粗野な面。第6章 中世期の終わり。第7章 ルネッサンスと改革。第8章 近代社会—初期段階。第9章 革命への準備—英国。第10章 革命への準備—フランス。第11章 フランス革命—憲政段階。第12章 フランス革命—プロレタリア段階。第13章 イングランドの産業革命。第14章 イングランドにおける政治動向。第15章 大陸での反動と革命。第16章 1871年のパリ・コンミュン、それに続く大陸の運動。第17章 ユートピア主義者—オーエン、サン・シモン、フーリエ。第18章 ユートピア社会主義から近代社会主義への移行。第19章 科学的社会主義—K.マルクス。第20章 闘う社会主義。第21章 社会主義の勝利。「都市」について(第2章参照)。

ところで、未だ邦訳もなされていない1897年に、日本でもっとも早く『資本論』を紹介したのは山川均である。それは、『平民新聞』に掲載されたものであり、上記のモリス・ボックス『社会主義』第19章に依拠するものであった。

²⁾ エリノア・マルクスは、K.マルクスの末娘である。

³⁾エイヴリングはエリノアの夫であり、S. ムーアと共に『資本論』の英訳を行ったことでも知られている。

⁴⁾小野二郎『ウィリアム・モリス』（中公新書、1973年）による。

⁵⁾ハモンドは革命の全過程を知り尽くした老人という設定になっている。しかし、それは単なる老人ではなく、「わたし」の何世代か後の未来、つまり「わたし」の子孫であることをにおわせてもいる。

⁶⁾かなり古いものだが、宇野弘蔵、鶴飼信成、有泉亭「経済学者の立場から法律学への疑問(座談会)」(『法律時報』日本評論社、1955年4月)がこうした問題に関して参考になる。

⁷⁾ここで、ホレボウ『アイスランドの博物誌』(Niels Horrebøw[1752], *The Natural History of Iceland*)の中の「第72章 蛇にかんして」という部分が引用されている。じつは、この章では「全島をとおしていかなる蛇にも出会わない」という一文が記されているのみであるという。アイスランドの蛇を持ち出すことによって、政治そのものを揶揄した表現といえる。モリス一流のアイロニーといえるかも知れない。思わず笑ってしまう。

(たなかしろう。宮城学院女子大学、経済学)